

認定看護師セミナー

認定看護師セミナー

急性腹症の基本と対応

涌井 幸恵

新潟県立中央病院 救急看護認定看護師

急性腹症とは、急激に発症した腹痛の中で緊急手術を含む迅速な対応を要する腹部疾患群（胸部も含む）のことをいう。一般外来や救急外来を急性発症の腹痛で受診する患者の頻度は全受診患者の5-10%といわれ、そのうち重篤または手術が必要になる患者は20%前後となっており、比較的遭遇する確率が高い疾患といえる。腹痛が必ず消化器系疾患とも限らず、循環器系、婦人科系、泌尿器科系などさまざまな臓器が関係している。そのため、急を要する疾患も多くみられる可能性がある。腹痛を訴える患者に対して、緊急性が高いかどうかを判断することが重要であり、患者の訴えやバイタルサイン、身体所見からさまざまな情報を収集し、アセスメントすることが必要である。まずは、ショックの徴候があるかどうかを見極める。顔面蒼白や冷汗、頻脈や頻呼吸などの症状と併せて、ショックスコアが5点以上であるかを観察する。ショックが疑われれば即介入が必要となる。ショックでないことがわかれば、緊急度が高いかどうか判断するために情報を収集する。患者の訴えでは、「突然の」「急性増悪」「持続する強い痛み」など緊急性が高い疾患を疑うキーワードがある。腹痛は、痛みのメカニズムにより内臓痛、体性痛、関連痛の3つに分類される。一般的に痛みの感じ方は、管腔臓器由来の間欠的な非限局性の内臓痛から腹膜由来の激しい、持続した、限局性の体性痛へと移行するといわれており、体性痛がみられる場合には手術の適応となる場合が多い。そのため問診により痛みの性状や程度を把握し、視診、聴診、打診、触診などから身体所見をとり、緊急度の判断を行う。患者に対して、迅速な対応が必要になると予測される場合には、処置や手術がスムーズに進められるように臨床検査を行いながら、患者の状態を経時的に観察し、痛みや突然の状況に不安感や恐怖感を抱いている患者の心理を理解しながら対応していくことが必要となる。

【略歴】

1997年 新潟県立看護短期大学卒業
2001年 新潟県立中央病院勤務
2016年 公益社団法人 日本看護協会 看護研修学校卒業
同年 救急看護認定看護師取得
2017年 新潟県立中央病院 救急内視鏡センター配属